

マルチン・ルターの病歴

滝上 正

日本医史学会神奈川支部会長

受付：平成23年4月8日／受理：平成23年10月28日

要旨：マルチン・ルターは宗教改革者として偉大な業績を挙げたが、一方、一生の間に多くの重病に悩まされ、生涯の終盤の1/3では病気が宗教活動に暗い影を落としている。しかし、わが国では彼の病歴についての専門的調査、研究の報告は全くない。

30歳代後半から頑固な便秘に悩まされ続け、痔核、脱肛を起こすまでになった。40歳代に入って、めまい、耳鳴り、難聴が起こるようになり、これは慢性中耳炎の急性憎悪によるものであって、耳漏、乳突炎の自潰にまで進展した。同じ頃より、急性冠症候群、尿路結石と排尿障害、痛風発作、下腿潰瘍を始めとする生活習慣病の度重なる再発を繰返し、1546年2月(63歳)、急性心筋梗塞で死亡した。

キーワード：ルターの病気、ルターの死因、ペスト、イギリスの発汗熱、梅毒

新大陸の発見(1492年)、そして宗教改革とともにヨーロッパの歴史は中世が終り、近世に入る^{1a)}。マルチン・ルターはこの変革の時代を生きた偉人である。

彼の生きた時代はルネッサンスの花が咲きほこった時代でもあった。一方、ペストその他の伝染病が猛威をふるった疫病の時代とも重なる。彼の周辺におしよせたペストを始めとする諸々の疫病が彼の生活、信仰に及ぼした影響を知ることはペスト史に関心を寄せてきた私には重大な関心事である。

また、ルターの時代ではペストも含めて病気はすべて神の裁きないしは悪魔の仕業とうけとめられていた^{1b)}。ルター自身も病気をそのように解していたが、聖職者としての彼は具体的にはペストにどのように対応したのであろうか。

ルターは多病の人であった。慢性疾患、とくに今日でいう生活習慣病のいくつかが彼の人生の後半に顕症化し、相互に関連しあいながら、再発を繰返しつつ重症化した。心身相関の立場からすれば、彼の行動、思考、信仰に彼の持病が無関係ではあり得なかったはずである。私は病いを通して

彼の人間的側面を眺め、彼を身近な人として見つめてもみたかった。

当時のヒトの推定平均寿命は25~30歳であった^{2a)}。多病に耐えながら、ルターはその頃としては63歳という長寿をどのようにして全うしたのであろうか。

医師のみならず、誰もがこれらの諸点は関心のある事であろう。

しかし、本邦ではルターの病歴にかんするまとまった資料は見当たらない。その解明にあたり、畏友クラウス・アルテンドルフ Klaus Altendorf から送られたノイマン J. Neumann の著書“Luthers Leiden”³⁾は裨益するところが大きかった。ただ、私は感染症を中心に内科を専攻した関係から、内科疾患領域以外にはきわめて暗い所が多く、専門分野についてはそれぞれ専門家のご指導をいただいた。

もとより私にはキリスト教について語る見識は全くない。本稿では、ルターの遺した偉大な業績、年譜をたて糸とし、それに「病」がよこ糸として如何様にからみついていたかをノイマンの著書を中心にして検証、記載することとした(以下に述

べるルターの個々の病歴の細部は上記のノイマンの著書に基づくものが大部分であり、その細部をその都度、文献としては紹介してはいない。

ルターは生涯をとおして彼をとりまく人々に2,500通に及ぶ膨大な量の書簡をしたためていて、資料として彼の書簡は重要である⁴⁾。書簡は当時は相互の情報交換の重要な手段であった。

2009年、ハレにある州立博物館において「ルター展」が開催され、豊富な資料も入手でき、それらも参考とした⁵⁾。

I ルターの時代の疫学

I-1 ペスト

14世紀中葉、ヨーロッパではいわゆる「黒死病」が荒れ狂った。その後もペストは波状的に流行を繰返し、ヨーロッパでは当時、ペストの流行のなかった期間は10年と続かなかった⁵⁾。

ルターは1508年(25歳)にはウィッテンベルクの大学(代理)教授(1512年正教授)^{6a)}になっているが、彼の存命中に限ってみると、同地方は、5回ペストに襲われている。それは1505(ルター修道院入りの年)、1516、1527、1534/35、1538/39年であったが、ルターが5回のペストのすべてに関与してはいない⁵⁾。また、彼はペストには罹患はしていないが、彼のペスト観も上記の神罰説が出るものではなかった。ルターは「ペストは神意であり、神による懲罰なのである」と述べている⁷⁾。

16世紀前半のドイツ(神聖ローマ帝国)でのペストの流行状況を一瞥しておこう^{1b)}。

アウグスブルクでは1511年には4,870人、1512年には2,980人の死亡者があったが、この数はペストのため、例年の死者数の1,800人を大きく上回っていた。1517年、ミュンヘンはペスト大流行でうちのめされ、市民は家の外へも出られないくらい沈み込んでいた。その時、桶屋のギルドが「桶屋の踊り」を復活させ、市民を家外に誘い出し、生きる喜びと勇気を与えた。皇帝マキシミリアン1世(1459~1519)は晩年の7年間は旅行にはいつも自用の棺桶を携行して不慮のペスト死に備えていた。1520年、アーヘンでペストが大流行し、皇帝カール5世は戴冠式を延期した^{8a)}。し

かし、当時の人々はペストだけではなく、絶えず、飢餓、戦争、災害、そして死への不安、恐怖にこののいていた。アルブレヒト・デューラー(1471~1528)の木版画「黙示録の四騎士」はペスト、飢餓、戦争、死への恐怖を象徴的に表現している^{8b)}。

I-2 梅毒⁹⁾

1492年、コロンブスの率いる90人の船隊が新大陸(実はバハマのサンサルバドルであった)を発見した。次いで、コロンブスは1493年にも1,500人よりなる第2次の探検航海に出た。ヨーロッパ各地から集まった探検隊員たちは探検先の現地で梅毒に感染し、帰郷後に梅毒スピロヘータを各地にまき散らすことになったといわれている。流行はまずは1493年3月、バルセロナから始まり、1495年には西ヨーロッパ全域にまで広がったのである。

15世紀末、人びとは性にたいしては非常におおらかで、なんらの社会的制約もなく、欲望の赴くままに開放的になっていた。カトリック教会は聖職者の妻帯を禁止し、姦通を罪としていたが、当時この規範は有名無実化し、聖職者が娼婦のもとへ通うことすらあったという。また、修道院では修道女が無償で性行為を行うこともあった。娼家からの税収は教会や領主の重要な財源ともされており、娼家は市営や、教会が経営者であることもあった。そして、当時のヨーロッパの梅毒は現在とは異なり、急性の経過をたどり、予後は不良であった。

I-3 イギリス発汗熱^{1b)}

イギリス発汗熱という奇病は今日では存在しない疫病である。1486年に初めてイングランドで流行した。発熱、異常発汗などで発症し、急性の経過をたどり、致命率の高い伝染性疾患でペストと同様に恐れられていた。原因にはある種のハンタウイルスが擬せられている。

1507年、1518年にもイングランドで流行したが、第4回目の1528/29年、第5回目の1551年の流行はイングランドのみならず、ヨーロッパ大陸

でも流行した。その後の流行は知られていない。

II マルティン・ルター (1483~1546) の病歴

II-1 家族歴, 幼少年時代, そして修道院に入るまで —— できの良い子, 父との葛藤 ——

病歴の記載は生年月日から始まる。しかし、ルターの出生の年については、自身の資料でも一定していない。一般には1483年が確実視されている。この時代の人々にとっては自分の生年を知らないことは、それほど奇妙なことではなかったらしい¹⁰⁾ (疾患名などの記載に当たり、今日の医学的概念からは了解に苦しむ術語には原語のまま、または原語またはその和訳に“ ”をつけて記載をした。また、文献に忠実に日本語、英語、ドイツ語を混用した)。

彼は1484年には出生地のアイスレーベンから家族とともに、そこから10km西のマンズフェルトに移り住んだ^{6a)}。父ハンスはその銅鉱山で働き、いわゆる「成功者」となった¹¹⁾。当のルターは1488年から1496年までこの学校に通った。

彼はひ弱な子供であって、何度も重い病気にかったという。父親は彼を厳しく躰けた。そのことが彼の人格形成に少なからざる影響を与えたことは無視できないようである。そのためか、彼は内気な少年であったことを自身も認めている。さらに、きびしかった父への幼いころの恐怖、屈折した感情が、彼の後年の反骨精神の形成にあずかっているとみる精神医学者もいる。

彼の幼少時代の記録は乏しいのであるが、彼にはいわゆる遺伝性疾患はなかったとみてよい。彼は学業の「できのよい」少年に成長した。父は彼に世間並みの栄達を期待していた。彼には同胞は7(8?)人いたが、3人は幼くして死亡、2人の弟は1505年のペストで亡くなっている(ルターの一一家がアイスレーベンに居た時代)。そのためもあってか、父が彼に寄せる期待は大きかった^{12a)}。

ここで、さらに精神科医モックの考えを補足すれば、ルターは双極性障害の典型的な例であり、モックはルターの病気をこれで説明しようとした。精神分析学者エリクソンはとくに青年ルターには強い関心をよせている^{2b)}。

1497年(14歳)、マグデブルクのラテン語学校で約1年勉強していたとき、重い熱病にかかった。それは“typhus”らしいと記載されているが、チフスといえば、医学的には発疹チフスを意味する。しかし、その当時の疫学的環境から判断すると、彼は腸チフスないしはチフス性疾患にかかったと解するのが、妥当であろう。

1498年(15歳)から3年間、ルターはアイゼナッハ(マンズフェルトから西約20km)の聖ゲオルク教区学校で学んだ。ここでの生活は多感な少年時代の人格形成上(病歴とは無関係に)、重要な意義を持っていたように思われる。少年合唱隊Kurrendeの一員として喜捨を仰ぎながら、勉学を続ける少年マルチンは当地の上流市民コッタ夫人から目をかけられ、彼女の家庭にひきとられた。コッタ家の温かく敬虔な家庭の雰囲気はマルチンに新しい世界を開いてくれたのであった^{2b)13a)}。

1501年(18歳)、ルターはエアフルトの大学に入学したが、1503年(20歳)帰省先のマンズフェルトからエアフルトへもどる途上で、自分の短剣で不用意に腿を傷つけるという刀傷を負い^{2b)}大出血を起こし、感染も合併して治療は難渋し、長期化した。この刀傷は帰省先から同道した相手とのいさかいに決着をつけるための決闘(“Duell”)によるものであったともいう。

「できのよい子」に父はエアフルト大学で法学を修めさせた。1505年(22歳)の彼の修道院入りについては、その年の7月、帰省先のマンズフェルトから大学にもどる途上、シュトッテルンハイムで雷に撃たれた(現地には記念碑が建っている^{6b)})ことが契機になったとされている。その経緯は通常のルター伝に詳しいが、一説には3人の姉、一人の兄と同様、父はいずれは彼にも父自身の望む結婚を強制したかったらしい。それを避けるために、彼は修道院入りを決意したともいう¹¹⁾。ともあれ、父の意向に反した息子と父の間はしっくり行かなかった^{12b)13a)}。ただ、父の死(1530年)後は彼の気持ちは和んできたようである。

父はたいへん気難しく、怒りっぽい人でもあったという。このことが晩年、ルターが怒りっぽくなり、すぐ「きれる」ようになった側面に受け継

がれているのかもしれない。

II-2 修道院時代 (1505年~1521年)

——きびしい戒律, そして耳鳴, めまい, 便秘, それから便秘——

ルターは1505年(22歳)から16年間, エアフルト, そしてウィッテンベルクで修道院生活を送った(中断あり)。この間, 活発に社会活動も続けているが, 修道院では祈りの生活が中心であり, とくに厳しい戒律, 修行, 断食などを守った。ことに, 1511年までのエアフルトの修道院では, 厳格な規律が重んじられた^{2b)12b)}。このことが彼の肉体にも不可逆の変化をもたらしたことは否定できないであろう。また, 睡眠不足, 過度の精神的緊張が継続し, それはルターの精神状態を不安定なものにし, いずれは肉体的にも精神的にも破綻を予想させる要因の一つになったかもしれない。

ルターは1510年(27歳)秋, 修道会から, 命ぜられてローマに赴き, 翌11年春, 帰国した。出発時にも体調不良を訴えていたが, 帰途, ポローニャにおいて激しい頭痛と耳鳴に襲われた(以後, ルターはしばしば耳鳴に悩まされるようになる)。

1515年(32歳), 若くして(1512年)ウィッテンベルク大学教授となった彼は理想と現実のはざままで, 多忙のためもあるのか, 全身倦怠感を覚えるようになった。

1516年(33歳), ウィッテンベルクはペストに見舞われた。このとき彼は修道院にいた。市井のペストにどの程度かかわったのかはわからないが, ペストには恐れることもなく対応し, ペストにかかることもなかった。彼はペストの感染性を承知していなかった。

1517年(34歳)ルターは当時の免罪符乱売などを痛烈に批判した95カ条の意見書を, ウィッテンベルク大学付属城教会(現教会は1858年, 再建されたもの)の扉に貼り付けた^{12b)}。これは従来の善行, たとえばお金を寄進することなどによって人は救われるという宗教観を根底から覆し, 宗教改革の契機となった有名な事件である。

1518年(35歳)4月ハイデルベルク(彼はこの

ときはウィッテンベルクにいた, そこからは直線距離で400km強)での討論会に出席, 道中, 股ずれに苦しんだ。ルターは10月には, 彼の意見書にたいする教皇側の枢機卿カエタヌスの審問に応ずるべく, 徒歩でアウグスブルク(南に直線距離約300km)へ向かった^{12b)}。彼はこのとき, 胃腸障害(便秘, その詳細は後記)に悩まされ, 最後には乗り物を使ってやっとの思いでそこに辿りついた。

1517年のルターの意見書の一件以降, 教皇側から彼へのすさまじい反撃は続き, 彼の精神状態は不安定となったが, 1519年(36歳), 1520年(37歳)には特記すべき器質性疾患はみられなかった。

ルターは修道院時代に突然, 大声を発し, 意識消失を伴う痙攣発作をおこして院内教会堂内陣で倒れたことがあった(1519年?)。その原因については意見の分かれるところであり, 癲癇が疑われたのも当然である。

そこで再考すべきは, 彼がエアフルトの修道院に入るきっかけとなったシュトッテルンハイムでの前述の雷撃事件である。

癲癇発作のときに, 幻覚などの前兆(アウラ)がしばしば先行する。使徒パウロがダマスカスへの途上で経験した周知の神秘的体験(使徒行伝26:13)は, パウロが前兆としての幻視を伴った癲癇発作をおこしたのだという説がある。そして, ルターの雷撃事件も, ルターがパウロと同様に癲癇の前兆に基づいて神秘的体験をしたのではないのか, 更には, ルターは癲癇を持っていたのではないかという説が登場する。

そこで, ルターの雷撃事件を考えなおしてみたい。ルターのばあい, 彼のすぐそばに雷が落ちたという客観的な事実があった。それは, 前兆としての幻視ではなく, 現実に稲妻が走り, 雷が落ちたのである(かつての私の勤務先の研究所は堅牢そのものの頑丈な建物であった。ある夏, その建物の避雷針に雷が落ち, そこから20mくらい離れた地下室にいた私はその瞬間, 「腰を抜かした」ことがある。それはものすごいショックであつ

た)。我が身の周りに雷が落ち、はね飛ばされて突然、死の恐怖に襲われた時、人は何を叫び、何を祈ることだろうか。ともあれ、ルターの雷撃事件は癲癇、あるいは癲癇の前兆とは無縁であった。

さらに、彼には癲癇に重要視されている遺伝的素因はなかった。また、当時は癲癇には有効な治療薬はなかったため、彼は癲癇の発作をくりかえしてしかるべきと想定されるが、彼には修道院内の事件以後にはこの種の発作は見られていないという。

ノイマンはルターの修道院内教会堂での痙攣、失神発作の原因は、彼が1523年以降、しばしば襲われことになった彼の言うところの“メニエール病”（1519年？ 当時には顕症化してはいなかったが）に、心因的ならびに身体的の要因が加わった結果だろうといい、彼も癲癇説を否定する。そして、心因的要因には彼がカトリックの古くからの伝統に反発したことへのストレス（1917年、95ヶ条の意見書を発表）、肉体的要因には前述のごとく修道院での厳しい生活規制、かたよった食事や水分不足などが考えられるという。

ここで、私見を述べれば、生活や食事の厳しい規制、睡眠不足のもとで、精神的には極限の緊張を強いられ、肉体的には内部環境（代謝産物、電解質、ホルモンなど）の失調状態下に長期間おかれたときには、ヒトは、基礎疾患の有無には関係なく、それだけでも上述の教会内の事件のような発作性の身体的反応をおこし得るものである。私はルターの発作は癲癇あるいはメニエール病とは全く無縁の一過性の身体的反応であったと考える。

そもそも、「メニエール病」は反復性、回転性めまいにたいして、1861年にメニエールが提唱した疾病概念であり、平成20年に厚労省研究班は本症の診断基準を規定している¹⁴⁾。

ルターに見られた（ノイマンのいう）“メニエール病”ないしはめまい、難聴などの原因については、別に詳しく私見を紹介したい。

1521年（38歳）、ルターにとっては苦難の年で

あった。95ヶ条の提題後4年を経過して、この年の1月にはついにルターは教皇から破門を受け、5月には帝国議会からは追放の刑に処せられた^{12b)}。前述の胃腸障害（便秘）はその後も続いていた。

彼はウォルム（南東に直線距離約350km）にある国会からの喚問をうけて、そこに向かうことになったが、この旅は彼には肉体的にはかなりの負担になっていた。とても旅行には耐えられそうにもない状態であった（その原因、症状は上記の胃腸障害）。ウィッテンベルク市は彼のために2輪車と馬3頭を用だててくれたくらいであった。途中のアイゼナッハまでの旅は一応事なきを得たが、その後、胃腸障害は悪化した。道中、経過はすぐれず、治療（瀉血、水分補給）を受けながら、14日をかけて1521年4月16日、やっとの思いでウォルムスに到着した。翌日の尋問当日も困憊状態にあり、まともに尋問に答えられる状態ではなかった。18日にはようやく回復した。まさに命がけの旅であった。

一方、ここまでの道中では彼は一般大衆からは好意をもって温かく迎えられた^{12c)13b)}。これは民衆がルターの宗教改革へ寄せる支持、高位聖職者への反感の表れであった。現在、ウォルムスの城外には同志に囲まれたルターの壮大な記念碑が建っている。

さて、前述したように1518年から始まり、彼を悩まし続けてきた上記の胃腸障害を彼は“Gählige Krankheit”と呼んでいるが、これが一体何を意味しているのかははっきりしない。ファソルトは胃、十二指腸の炎症であろうと推察しているが⁴⁾、私はそれをその頃から彼に始まった頑固な便秘、それに伴う腹部症状と理解したい。“gählig”は「固い」を意味した古語で、ルターは「固い便」（便秘）に苦しめられていたのである。

ウォルムス到着後も彼はそれまでの頑固な便秘、それに伴う腹部症状に苦しんだが、さらに、胸部絞扼感などの心症状も加わるようになった。ルターにみられた便秘、胃腸症状、そして心症状にたいし一括して、ノイマンは胃・心臓症候群 Gastrocardiales Syndrom を想定するのが妥当ではないかという。ただし、この概念は今日では一般

化しておらず、普遍的の内科診断学書にも記載されていない。この症状は命名者、ドイツの内科医にちなんでレムヘルト Roemheld 症候群とも呼ばれており、今日では胃泡症候群あるいは脾彎曲部症候群とよばれている概念がこれに該当すると思われる。胃泡内に、また極度の便秘時、大腸内、とくに脾彎曲部に空気が大量にたまって、左方横隔膜を挙上し、偽狭心症とよばれるような心症状をおこすことがあるからである¹⁵⁾。ルターのぼあい、便秘が永年続いていたことから、この可能性は否定できないと思われる。

また、発症機序は異なるが、「非心臓性胸痛 NCCP」(虚血性心疾患様疼痛)が(胃)食道逆流症 GERD のとき、消化器症状として合併することがある¹⁶⁾。そして、ルターが GERD にかかっていたことも否定はできない。

いずれにせよ、この時点でのルターの心症状は便秘ないしは腹部症状と関連があり、「非心臓性胸痛」であったと解したい。また、このときの心症状は6年後の1527年におこした狭心症の発作との関係はなかったと思われる。

かくして、ルターは1521年以降は気の毒なくらい、多病に悩まされることになる。

しかし、上記のウォルムス到着前後の彼の極度の消耗ぶりが便秘とそれに伴う器質性の腹部や心症状のみに基因するの否かは問題であろう。この点については後述する。

II-3 ワルトブルク時代(1521年5月~1522年3月)

—孤独、不眠、便秘、痔—

ルターは帝国議会からは追放処分を受けたが、ザクセン選帝侯フリードリッヒ賢明王の庇護のもと、1521年5月から10ヶ月間、ワルトブルク城内にかくまわれることになって、彼の生活は一変した。かくまわれるに至った経緯や城内で彼がなしたとげた聖書のドイツ語訳などの偉大な業績は専門書に詳しい。ルターのワルトブルク時代は実りは多かったのと裏腹に、にがい苦しい時代でもあった。

ただし、城内では修道院にいたときとは違って、他人と親しく話し、明るくつきあえるように

はなった。また、食事は豊かで、ワインも十分にあった。この城へ来たころのルターは痩せこけていて、近くで見ると肋骨が数えられるくらいであったというが、ここへ来てからは肥満体になってきた。ただ、一室に閉じこもって、座ったままのことが多くなり、運動不足に陥っていた。

彼は下界よりは神の国に少しでも近いと信じられていた349mの山頂に人里離れてそびえたつ堅固なワルトブルクの山城を「鳥の国」と呼んでいたが、ここでの彼の生活は精神的には孤独に耐えての10ヶ月でもあった。

ここで肉体的に彼を最も苦しめた病状は1518年以降、依然として続いた頑固な便秘、下腹痛、それから来る随伴的の精神症状(いらいら感、不眠)、(前記の非心臓性の)胸痛であった。痔核もできてしまった。彼は便秘に困りぬいて「汗が出るくらい力んでも排便がない、血が出る」などとメラニトンををはじめ数人の友人に便秘のつらさを切実に手紙で訴えていて、その内容は少なくとも私には手紙に書くのを躊躇するような痛々しいものである。それにたいし、散歩、狩を勧められる人もいた。いつとき、アロエを入手して苦痛がとれたこともあったが、効果は長続きはしなかった。城内での脂肪の豊富な食事、十分と思われるアルコール飲料が便秘には不適切と彼は判断し、城を出ることも考えた。

彼はほどほどの飲酒家であったようだが、ドイツ人の酒癖の悪いのを嫌っていた。なお、ルターのアルコール飲料の問題は彼の尿路結石、痛風とも関連するもので後述したい。

彼の便秘には器質性疾患はなかった。しかし、好転しない便秘、腹痛、そして不眠、(現在でも)人里離れた山城での孤独な生活、加えて、著作、聖書のドイツ語訳という知的緊張を要する作業の故に、修道院時代とは異質の極端な精神的不安定状態に陥っていた。一過性に幻視、幻聴がおこってもおかしくない。こんな矢先に起こったのが、人口に膾炙したインク壘の投げつけ事件であった。

II-4 ウィッテンベルクへもどって (1530年まで) ——治らないめまい, 耳鳴, そして頭痛, 失神発作, さらに尿路結石, 狭心症, 下腿 潰瘍——

ルターは1522年(39歳)3月に, 10ヶ月間滞在したワルトブルク城を出てウィッテンベルクへもどった。もどったのは健康上の問題からではなく, 彼の立場上の問題からであった^{12d)17a)}。環境が変わったせいか, 当座は便通のぐあいは好転していた。日常生活にも問題はなかった。

1523年<40歳>春, 嘔吐が先行する胃部不快に苦しめられた。彼は子供のころ, 車酔いをよくおこしたというが, 嘔吐の原因ははっきりしない。アルコールの飲みすぎが原因かもしれない。ノイマンは前述のレムヘルト症候を考えている(GERDも考えられる?)。

久しぶりに頭痛, めまい, 耳鳴をおこすようにもなった。1510年のローマ旅行以来のことであるが, 胃症状も合併するようになった。秋には重症の失神発作にも陥った。これらも(1519年?のときと同様に)ノイマンは“メニエール病”の発作と解しているが, 4年後(1527年)にも同様の失神発作をおこしている。

このときの一連の症状の原因は何であったのか。神経病的には椎骨脳底動脈硬化症ないしは内耳梅毒を疑うべきであるが¹⁸⁾, 前者であれば, 早晚, 脳梗塞にまで進展したはずである。後者の梅毒に感染した事実の確証は不明確である(後述)。かくして, 神経病学の面からは両者ともに原因としては否定できる(冠動脈, 下腿動脈に硬化症はあったことは後述する)。1541年, ルターの耳症状は耳漏, さらに頸部膿瘍とその自潰にまで進展したが, これらを視野に入れてこの原因問題についての私見は項を改めて詳述したい。

彼は1524年(41歳)にはかつての同志を攻撃するようになった。おこりっぽくもなった。「農民の子」であり, 「鋤夫の子」であったルター, そして農民の導き手であったルターは農民戦争(1524~25)にさいしては, 農民と対立し, 農民弾圧を唱え, 農民から「裏切り者」と呼ばれなければならないことになって, 宗教改革者としての

ルターにはつらい年になった^{12e)12f)}。

1525年(42歳), 前記のように1523年当時, ルターは体調不良であったが, この年も便秘, 痔核, そして頭痛に苦しみ, 不調を訴えた。これは宿苛の“morbus Gallicus”(ガリア人の病氣, フランス病, 梅毒)のためかともされた(彼は同時に“Syphilitiker”梅毒患者, 且“Alkoholiker”アルコール中毒患者だったかもしれないとされている)。ただ, 梅毒という根拠は薄弱であった。その根拠は1523年6月, ウルムの医師が, ルターが梅毒らしいと書いた友人あての手紙のみである。当時の世間の風潮として, 原因の特定できない体調不良の続く状態にたいし, 一般的に安易に梅毒を擬していたらしい。気軽にからかうように梅毒とよんでいたのであろうか。

修道院では厳しい戒律を守り, 一般社会からは隔絶され環境で禁欲的な修道生活を強いられる。ただこのことが, 修道僧の性病としての梅毒感染を否定することの根拠にはならない。しかし, ルターのばあい, 性的な禁欲には耐えられたようだ^{2b)}。また, 梅毒初感染時の局所症状, その後の皮膚症状も彼の病歴には記載されていない。当時の梅毒は現在の梅毒とは異なり, 激しい急性の経過をたどった。素人にも初感染症状, その後の皮膚, 粘膜の症状が見逃されることはなかったであろうし, 予後も不良であった。彼には梅毒に罹患したという積極的な証拠はなかったとみてよいであろう(彼の子供の「先天性梅毒」の有無も問題になり得るが資料がない)。

この年の6月13日に彼は結婚した。彼は修道士42歳, 彼女カタリナ・フォン・ボーラ Katharina von Bora (26歳)は修道院を脱走した修道女であった。一度は終生独身を誓った二人の結婚には当然反対もあった^{17b)}。しかし, ルターは自分の最期の近いことを予感してこの結婚に踏み切ったという⁴⁾(上記の農民戦争が農民の敗北に終わり, 彼は身の危険を感じていた^{12g)})。また, 彼は結婚した理由に両親を喜ばせること, そして教皇と悪魔を困らせることをあげている^{12h)}。カタリーナは料理はきらいではなかった。マルチンは喜んでそれを食べて, さらに肥るようになったという⁴⁾。

1526年(43歳)、ルターには苦難の年となった。尿管結石による激痛発作(疝痛)に悩まされることになったのである(1521年に既に同発作があったという)。幸いなことに、排石により激痛は消失したが、その後、疝痛発作の再発を繰り返すようになった。ときには頭痛、めまい、失神発作も伴った。

1527年(44歳)の彼の健康状態は今まででは最悪の厄年となった。“Wendepunkt”(変わり目)の年となった。まず、1月1日に意識消失の発作があった。さらに、二、三日後には死の恐怖を伴う狭心症の発作に襲われた。そのときには、ある種の水薬(aqua cardui benedicti)がよく効いたと彼はいつているが、自然寛解の経過をたどったのであろう(この水薬の効果とは思われない)。

同年7月6日朝、突然不安感に襲われ、夕刻にはめまい、耳鳴りが加わり、ベッドを離れられない状態となった。それまでも繰り返してきたような症状ではあるが、今回の発作は最も重く、死を覚悟するほど絶望的であって、力も抜けてしまったという。彼はそのまま眠りこんでしまって、翌朝目覚めた。めまい、吐き気はなくなっていたが、耳鳴りは残っていた。この間、彼自身は意識を失っていたというが、単なる深い眠りなのか、意識消失が続いたのかははっきりしない。私はこの一日間の症状は急性冠症候群(ACS)と、それに由来する心原性ショックによるものであり、そこに耳症状が加味されたものとみたい(ノイマンは重症のメニエール病と解しているが、メニエール病だけではショックを起こすことはない)。

8月にはウイッテンベルクはベストに襲われ、民衆も大学も街をはなれた。選帝侯はルターに転居を勧めたが¹²⁾、「悪魔は逃れるものを追いかけ、とどまるものを襲う。したがって、何人も悪魔の手をのがれることはできない」といつて^{7b)}、自らの意志で街にとどまり¹⁹⁾、我が家を病舎として提供した。「2日で12人が死んだ。ベストのど真ん中の我が家で私は暮らしている」と友人に便りをしている。12月にはベストはこの街を去った。なお、ルターが1528年に作詞した讚美歌267番「神は我が櫓」は前年のウイッテンベルクでのべ

スト流行が背景にあったとされている^{6c)}。

1527年の11月には2回、年初のような心発作に見舞われ、私のために祈ってくれなどと気弱な手紙を友人にしたためている。

1527年をふりかえってみれば、この年は1年以内に数回の心発作に襲われ、重症の心原性ショックにも陥り、まさに厄年であった。

1528年(45歳)にはルターは痔核に悩まされたくらいでしのぐことができた。めまいもレムヘルト症候群もたいしたことはなかった。

しかし、1529年(46歳)1月にはまた、めまい、耳鳴りがおこり、頭痛も加わり精神的にも不安定となり、説教などもしばらくは中止せざるを得なかった。ただ、この度の症状は従前とは様子が異なるようだったという。4月には風邪にかかった。発熱、嘔声を伴い重症であって、5月になって漸く治癒した。流感であったかもしれない。その後、嘔声、“中耳炎”を伴う気道感染にかかり易くなった。このような症状は、従前からみられた耳鳴、めまいなどの耳症状をふくめて、その原因を(ノイマンのいう)メニエール病に求めることに更なる疑問をいだかせることになる(詳細は後述)。

イギリス発汗熱という奇病が1485年から1551年にかけてヨーロッパを数次にわたり襲ったことは前述した。本症の前半の流行はイングランドに限局されていたが、1528年の第4回目の流行ではヨーロッパ本土にも上陸し、1529年8月にはドイツ北西部の主ツビカウZwickau(ウイッテンベルクの南100km)とツェルプストZerbst(同じく西30km)が襲われた。ルターは本症を承知していたが、ウイッテンベルクは本症から免れていた。

ヘッセン方伯フィリップの仲介でルターはスイスのツィングリその他と1529年10月1日から4日までマルブルクに滞在し、宗教会議をもつことになった。しかし、ルターは前述のごとくこの年は年初から体調がすぐれず、そのため、当初から会談には乗り気ではなかった。また、両者には迫りくるイギリス発汗熱への恐怖もあった。そしてルターは方伯を無視する形で会談には参加せず、早々に、10月5日、ウイッテンベルクに引き上げてしまった。ツィングリも同日、おかれてそ

こを離れたが、イギリス発汗熱はその日のうちに当地を襲ったという（10月2、3日に両者は会談したという記録もある）。また、宗教会議の主題の聖餐の解釈についてはルターは始めから譲歩する気はなく、両人の意見はかみあわず、対立は続くことになった²⁰。ただ、10月4日ルターが妻にあてた手紙には一同元気である旨が記されていて、そこに彼の本心、計算を垣間見るような気もする。ともあれ、ルターの対応はツィングリー行の反感をかかったことは言うまでもない。

1530年（47歳）もルターは不調のまま、新年を迎えた。この年は彼にとっては1527年よりも大きな第2の「変わり目」の年となった。

まず、彼の新年の説教は荒れていた。体調もよくなかった。そして、年初から「痔」を患うことになった。排便時に肛門はクルミ大に腫れあがり、かゆみを伴い、出血も見えるようになった。指でおしても出血した。たぶん、脱肛（または痔核、あるいは両者）をおこしていたと思われる。失血性貧血にとまなり自覚症状の出現は免れなかったことだろう（ただし、体調不良というほかには貧血らしい症状の記述はない）。しかし、短時日でこの状態は寛解したようだ。

4月から10月まで、アウグスブルクでの国会開会中、ルターはコーブルクの領主館に滞在を余議なくされ、大きな住まいの中でわびしい拘束状態におかれた（彼は追放を受けた身であった）が、この間、あたかもカラスが泣叫ぶような声が朝早くから夜寝るまで彼を苦しめ、いらいらさせた（これは幻聴であった）。この他にも、4月以降、在来のめまい、耳鳴の併発を繰返し、5月からは増悪した。また、ある夕べ、彼は焰に包まれた蛇が塔にからんで塔のてっぺんから降りてきて森の中に消え去るのを見た（幻視⁴）。ただ、ワルトブルク城にいたときとはちがってルターは独りぼっちではなかった。見張り役を含む30人の市民といっしょであった。

そのほか、1525年以降、左の「下腿潰瘍」ulcus crurisが彼を苦しめ、当地に滞在中、潰瘍からは間欠的に排膿が続いた。

下腿潰瘍には末梢動脈疾患PAD、とくに虚血の

原因となる末梢の動脈硬化が基礎疾患として存在し、それに感染を伴ったばい菌は潰瘍はしばしば慢性、難治性の経過をたどり、衰弱する。本症には冠動脈または脳血管の硬化も合併しやすく^{21a)22}、ルターの直接死因は後述するごとく冠動脈硬化症による心筋梗塞であった。

かくして、コーブルク滞在中のルターの健康状態は総じてすぐれなかったが、8月に入ってやっと、好転した。しかし、滞在中の後半には行動能は低下して、説教、約束を取り消すようにもなった。また、自制心が欠如し、粗暴、おこりっぽくなり、他人を傷つける言辞を弄するようにもなって、彼の評判はとみに低下し、温厚な盟友メランヒトンさえもルターを遠ざけるようになった。

なお、この年の5月、ルターの父が死去した。

II-5 ウィッテンベルクでのその後（1531年以降） ——心不全、痛風、尿閉、そして食生活、 飲酒について——

1531年（48歳）に入ってひどい頭痛が続いて、ルターを悩ませた。彼はこれをサタンの仕業といっている。とくに午前中がひどかった。ただ、耳鳴、めまいがなかったので、説教などはこなせた。

1532年（49歳）1月22日早朝、激しい耳鳴、そして瀕死の心不全に襲われた。居合わせた医師は回復はむつかしいといった。しかし、幸いにも回復は早かったが、翌月にも心不全の発作をおこした。この2回の発作は何だったのか。彼が友人および妻にあてた手紙からノイマンは心不全を否定して、メニエール病の発作の結果、深い眠りに落ちたのだ、眠りは日常の緊張を強いられる仕事の故の、健康な眠りであったという。しかし、前述のごとく、メニエール病はあくまでも内耳疾患であって、心不全をおこすことはない。後述する急性冠症候群と解すべきであろう。2月にはまた、めまいの発作、頭痛が再発、継続し、身体的にも精神的にも弱ってきた。一時的に下腿潰瘍も悪化した。

年来の便秘も体調不良に加担した。そして、便秘には下剤よりもなによりも朝の「小さじ6杯の

バター」の塊が彼にはよく効いて、頭痛、体調不良も好転した。彼はバターは健康食品であって、ザクセン人が丈夫なのはバターをよく食べるからだといっている。(バターの具体的1日摂取量は不明であるが、これは高脂肪食を助長していたと考えられる)。

1533年(50歳)秋には左下肢に痛風発作を起こすようになった。痛風とは高尿酸血症に基づく激しい関節痛の発作をいう。母趾の中足趾関節が最も多くおかされるが、彼のばあい病変部は左“足”(くるぶしより先)の痛みと記されている。1538年、1540年にも再発作をおこしている。彼の左手の鋳型にはTophi(皮下痛風結節)形成を伴う典型的な慢性痛風性関節炎 Arthritis urica^{21b)}が認められている。陰湿な住居に住む下層階級に多いリウマチとは異なり、本症は当時の上層階級を襲って、美食家への現世での天罰ともされていた。

高尿酸血症は今日でいう生活習慣病ないしはメタボリックシンドロームと密接に関連している²³⁾。また、腎障害、尿路結石、動脈硬化の危険因子でもある²⁴⁾。後述するように、現にルターは1536年以降、尿路結石症に悩まされることになった。痛風患者の約20%には尿路結石症が合併する^{21c)}。

ここでルターのアルコールを含む彼の食生活を検証してみよう。彼は日常の食事は妻の手になるささやかな家庭料理を優先していた。また、適度にビールを愛した。弱いワイン(アルコール度不明)も好んだ。家庭では贅沢な食生活をしていただけではない。しかし、ワルトブルクやコーブルクで提供された食事や宮廷などの招宴ではご馳走をたくさん食べ、ワインを飲む機会も多かったと思われる。

今日ではビールは痛風患者には好ましくないとされているが、ルターがビールを好んで飲んだのにはもっともらしい理由がなかったわけではない。彼は1526年以降、頻回に尿管結石による疝痛発作に苦しめられてきたが、彼にはビールは何よりの利尿剤でもあった。医学的には今日でも尿管結石症に利尿をつけることが薦められている。

また、ビールは彼のばあい朝の排便(前述のごとく便秘は彼の宿苛)を促し、そしてビールは彼には一番の睡眠剤でもあった。ビールの銘柄にも好みがあった。彼の家にはビールの醸造販売権があって、自家醸造のビールもお気に入りであった。

ところで、ルターはアルコール飲料をどれくらい呑んだのであろうか。“mäßig”(まあまあ)に飲んだことは確かであるが、具体的にそれがどれくらいの量であったのか、またそれが医学的に適量の範囲内であったのかは判然としない。例えば、カール4世はほとんど飲まなかった“wenig trinken“といわれているが、実際には彼は昼食のときワインを3本飲んでいて、飲酒量の微妙な表現のニュアンスの実態は時代によっても異なるようである。ともあれ、ルターは当時としてはそこそこの飲酒家であったようだが、それは痛風の誘因たり得た。ただ、前述したように彼はドイツ人の酒癖の悪いのを嫌っていた。また、食事の内容は、簡単な家庭料理でも今日よりはずっと実質的でカロリーも多かったようだ。

ルターにはアルコールによる臓器障害、精神障害と思われる記録は見当たらない。

1534年(51歳)、1535年(52歳)の両年には珍しく問題はなく、難聴、耳痛が一過性に起こったにすぎなかった。

1535年にはウィッテンベルクはペストに襲われた。当時ペストは前述のように人への「神の罰」とみなされていた。また、ペスト対策の基本は“速やかに遠くへ逃げ、遅めに戻ってくる”こととされていた^{8c)}。大学はイエーナに移った。しかし、ルターは逃げ出さなかった。我が家をペスト患者に提供した。

1536年(53歳)3月には10年ぶりに再び、尿路結石の発作に襲われた(正確には初発作は1521年にさかのぼるらしい)。それは腰痛の形で出現し、年を越して翌1537年冬になって、おさまりはじめた。彼は医師からかねてよりの心疾患にたいし食事の節制を求められていたが、それはほとんど守られていなかった。そのことが結石症にもよいはずはなかったであろう。

しかし、1537年(54歳)1月末、福音主義者の

同盟会議に臨むべく、シュマルカルデン（ウィッテンベルクの南西、直線距離200km）に向って出立した¹²⁰。このときは体調はまだすぐれなかったが、2月に入り体調は戻り、同月7日にはシュマルカルデンに到着した。道中も宿泊先の旅籠も寒かったというが、2月8日から、これまでに経験したことのない血尿、続いて疝痛発作を繰り返すようになった¹²¹。とても、会談に臨める状態ではなかった。そして、2月19日から8日間にわたる尿閉が続いたのである。尿閉は本当につらい症状である。身体も衰弱してしまう。侍医団は例えば碎石器や導尿のためのカテーテル類似の器具を取寄せるなどあらゆる手段を尽くした。ルターのペニスに口をあてがい吸引を試みたともいう。しかし、効果はあがらず、万策が尽きた。ついに、ルターも死を覚悟した。そして、彼は自宅あるいはゴータで死にたいと願った。評判の名医、エアフルトの医師シュツルツ教授はルターをウィッテンベルクに帰すことを勧め、彼自身、そして他の医師も付き添うことで2月26日に当地を出発した。途中の悪路、車の動揺はひどいものであった。しかし、それが幸いしたのか、2月27日夜、途中のタムバッハにおいて、突如、排石とともに尿が出たのである！尿の総量は11カンネ（1カンネ＝約1リッター）に達したという。しかし、これですべてが終わったわけではなかった。

ルターは更に旅を続けたが、翌2月28日には排尿障害、疝痛発作が再発し、下痢、嘔吐も加わり、衰弱してきた。彼はついに遺書を書いた。かくして、全身衰弱はつのも、やっとの思いで3月14日にウィッテンベルクに帰りつき、漸く元気をとりもどした。しかし、依然として排石は続き、疼痛、嘔吐、下痢を伴いながら1537年末までに、総計20個以上の自然排石を認めたようだ。自然排石が可能な結石の大きさは5mmまでとされているが、“bohnenngroß”（インゲンマメ大）の結石が排石されたと記されている。

II-6 晩年のルター（1538年以降）

——さらに耳漏、頸部膿瘍、そして心筋梗塞——

1538年（55歳）になっても尿路結石の不安は消えなかったが、それ以外にもこの年も彼にはいやな年になった。7月前半には先ず赤痢にかかり衰弱した。後半には関節痛（部位不明、背痛か?）も始まった。痛みは8月には床の上を転げまわらないではいられないくらいに激しくなり、発熱もともなった。典型的な疝痛発作に腎盂腎炎を合併したのであろう。さらにこのとき、痛風発作、赤痢の再発が追討ちをかけ、三重苦ですっかり衰弱した。

この年から翌年にかけてウィッテンベルクはまたもやペストにも襲われたが、彼はいつものようにペストに立ち向かった。前回同様、自宅で説教もし、ペスト患者の世話もした。

1539年（56歳）に入ると復活祭前後から、また、めまい発作を起こすようになり、うつ状態も加わり不機嫌となり外見的にも衰弱はかくせなくなった。尿路結石による疝痛発作は依然として続いた。

1540年（57歳）に入り、彼は回復のきざしを見せ、近隣にでかけて説教もした。

1541年（58歳）1月に入ると、また、下腿潰瘍から排膿を繰り返すようになった。そして、4月には左頸部に膿瘍が出現、自潰したが、その直後に悪臭を伴う膿血性の耳漏も認めるようになった。この症状はルターを悩まし続けた耳鳴、難聴などの耳症状の解明に大きなヒントを与えてくれるが、以降、完治することはなかった。そして、耳鳴、難聴は増悪した。この頸部膿瘍、耳漏は永年にわたる左側の慢性化膿性中耳炎に基因するものであると思われるが、詳細は後述する。

同年7月には腰痛、そして排石をみた。排石にはやはり難渋した。この年の後半には問題はなかった。

1542年（59歳）1月には疝痛、頭痛が再発、衰弱も加わり説教はできなくなった。2回目の遺書を書いた。しかし、ビールは彼には良い利尿薬であった。

1543年（60歳）頭痛はさらにひどくなり、一層

衰弱し、歩行も困難となり、読み書きもできなくなった。いらいらが募り、怒りっぽくなって、すぐ「きれる」ようになった。当然、他人との交際は疎遠となった。夏にはまたもや赤痢に罹患、6月には週余にわたる疝痛、7月、12月には心臓発作も起こした。人びとの好意から結石に効くという薬が贈られた。例えば、プロイセン公アルブレヒトからは貴重な琥珀が提供された（琥珀は一種の化石で、貴重なものである。これの効能、使用方法などは私にはわからない）が、残念ながら、いずれも効かなかった。

下腿潰瘍にたいしては持続的な排膿処置がとられたが、「体液病理学的立場」からは「悪い体液」を排除すること、そして、今日的視点からは排膿を促すことは合理的なことであった（当時は体液病理学が主流であった）。かくして、全身状態は多少改善されたようである。いずれにせよ、ルターの身体的疾患が精神心理面に暗い影を落とすことになった。

1544年（61歳）には歩行ができ、再び説教ができるまでに回復はしたが、依然として疝痛、狭心症状はおこった。

1545年（62歳）も狭心痛で年が明けた。あわせて、頭痛、めまい、耳鳴、さらには視力障害（白内障）をも訴えるようになった。周囲の人びとを失望させるくらいに不機嫌となり、怒りっぽくなった。6月、8月には疝痛発作が再発した。夏にはライプツヒ、ハレなどに説教に出かけたが、ウィッテンベルクに連れ戻された。

1546年（63歳）に入ってルターの調子はよくなかった。1月17日のウィッテンベルクでの説教はそこでの彼の最後の説教となってしまった。

1月20日のルターのところでの夕食は盟友メランヒトンらとの最後の夕食となった。

ルターは恩義ある故郷のマンズフェルト伯家の相続問題の調停を依頼されていたが^{6d)}、それを果たせず、それは懸案として残っていた。伯爵家はルターのアイスレーベンへの来訪を待っていた^{12k)}。そのため、ルターは前年末、一旦出立したのであるが、同道したメランヒトンの病のため中断した経緯があった。

ルターは1月23日、3人の息子らと一緒にアイスレーベンへ出立した。メランヒトンは病のため、同道できなかった。ルターにはよくあることではあったが、自分の薬を旅に持参することを忘れてしまった。更に、冬の北ドイツの悪天候、悪路も手伝って、病身の彼にはこの旅はこたえた。ザーレ川の増水のため足止めもされた^{6e)}。それでも、途中ビール、ワインを楽しみ、ハレの聖母教会では説教もできたという。

1月28日、アイスレーベンの手前のザーレ川を渡るには危ない思いもした。街に入る前には少し歩いた。そして、やっと同日、目的地たどりついた（ウィッテンベルク～アイスレーベン間、直線距離約80km）。ルターは道中、胸部拘扼感、呼吸困難などを起こし、到着後メランヒトンに宛てた手紙には病状を具体的に知らせているが、妻のカタリーナにはそれほどでもなかったと心遣いを見せている。

2月始めには少し調子を取り戻した。2月14日には最後（となった）の説教をした^{6d)}。同日の妻への手紙には「今週、私は帰りたい」旨、そして調停は順調に進んでいることをしたためているが、これが彼の最後の手紙となった。

2月17日夕刻、今までにない胸部拘扼感に襲われて処置を受け、午後9時ころ眠りについた（一時、眼がさめもした）が、2月18日午前1時胸部苦悶とさむけを訴えた。彼は冷汗（心原生ショックである）をかきながら語った。

「私は寒い。病はおもい。私は死ぬ」。「私は苦しい。私はアイスレーベンにいたい」

医師、知人に見守られながら、ルターはヨハネ福音書3章16節の聖句を、そして詩編68節を頌じて、神に召された。2月18日午前3時であった。

死後、ルターが書いた有名な言葉が見つかった。

「我々は乞食だ、それが本当だ」

“Wir sind Bettler, das ist wahr”

（臨死状態の彼のことば^{6d)}）

遺体はウィッテンベルクの城教会に埋葬されている。

III 考察

III-1 慢性中耳炎²⁵⁾⁻²⁹⁾

致命的ではなかったが長年にわたりルターを苦しめた慢性疾患は二つあった。一つは耳鳴、めまい、難聴を中心とする耳疾患であり、他の一つは頑固な便秘であった。

耳疾患は1511年に耳鳴などで始まり、最晩年に至るまで実に40年以上にわたり続いた。ノイマンはこの病因をメニエール病によるものと判断した。これは正解のひとつではある。しかし、1541年になって上記の耳症状のほか左側の耳漏、(乳様突起炎による)頸部(正確には耳介後部?)の膿瘍がみられるようになった。前者の症状は急性中耳炎の重症型ないしは慢性中耳炎の急性増悪の病態であり、後者はそれらの合併症であるが、ルターの耳疾患はその経過から判断して、慢性化膿性中耳炎とその合併症に該当すると考えたい。

さて、彼の耳症状とその後の続発症状の連鎖をどのように理解したらよいであろうか。

抗菌薬がなく、今日とは比較にならない個人、社会の劣悪な衛生環境下では、小児期に無自覚的に中耳炎に罹患し、それが慢性化して急性増悪、寛解を間欠的に反復することは珍しいことではなかったであろう。

1529年には前述のごとく発熱、嘔声を伴う重い風邪症状にかかり、そのときには“中耳病変”³⁰⁾も急性増悪したようである。症状が去れば、治癒として処理されたにちがいない。1541年に至り、左耳から悪臭を伴う血膿性耳漏、加えて左頸部膿瘍とその自潰、排膿をも見るようになった。このような一連の経過はメニエール病には起こりえないことであって、それらは化膿性中耳炎およびその続発症と解するのが合理的である。また、中耳の炎症は内耳、脳膜、脳実質へ一過性に波及し、その刺激症状として一時的に回転性めまい、嘔吐、頭痛、さらには痙攣発作、意識障害などの脳膜刺激症状ないしは脳圧亢進症状を起こし得たことと思われる。

ルターの当初の耳症状はメニエール病であった

かもしれない。しかし、ある時点において(1529年?)、あるいは当初から急性中耳炎が未治療のまま慢性の経過をたどり、間欠的に急性増悪を繰返し、ついには乳様突起炎までも合併し、さらには、内耳、脳膜への刺激症状も呈し得たと理解したい。

III-2 便秘

1520年前後のルターがしたための書簡の主題の一つは自身の便秘であった。それほど彼は便秘に苦しんだ。1521年、国会から喚問を受けた頃、それに続くワルトブルク時代は最悪であったようだ(II-2, 3)。しかし、1532年以降、便秘についての記録は見当たらない。

原因に悪性疾患はなかったとみてよい。しかし、1530年前後からは下血による出血性貧血によって「体調不良」は見られたことだろう。

便秘に伴う心症状についての私見は本文中に記した。

III-3 尿路結石症 痛風

ルターは1526年から死に至るまで20年にわたり、ほぼ毎年、再発性尿路結石症に悩まされてきた。一般的には本症の再発は10%強³⁰⁾にみられるという。ルターのばあいその主症状は腰痛ないしは疝痛発作と排尿障害であった。腎機能障害を合併してはいなかったのだろうか? 1537年には重い尿閉に苦しんだ。

彼の尿路結石症は1533年に先行した痛風と密接な関連がある。高尿酸血症と強酸性尿は尿路の尿酸結石形成の要因であり、再発を繰返したルターの結石は尿酸結石であったと思われる³⁰⁾³¹⁾。しかし、これに特徴的とされている結石または尿の色の記載は見当たらない。

彼はかなりの量のビールを好んで飲んだ。その量は不明であるが、これは利尿的には働いたことではあろう。半面、尿酸結石の形成にも与したことも否定できない。また、便秘の治療として相当量のバターを摂取していた。これも結石形成に加担したと思われる³²⁾。

III-4 動脈硬化 メタボリック症候群 急性冠症候群

動脈硬化は今日では生活習慣病の一環として理解され、その危険因子には高血圧、高血糖、脂質代謝異常、肥満、タバコ、ストレス、運動不足、さらには最近では高尿酸血症³³⁾などが指摘されている。

肥満にかんしていえば、彼の成人時代の全身の肖像画はいわゆる肥満体で、体重は100~120kgあったらしく、内臓脂肪型肥満であったにちがいない。これはメタボリックシンドロームの第1条件を満たす状態である。インスリン抵抗性もあったと思われる。飲酒を含む彼の食生活(前記)から推察すれば、ルターのばあい血糖値、血圧などもメタボリックシンドロームの基準を越していたかもしれない³³⁾。

閉塞性動脈硬化症は色々な形で顕症化する²²⁾。彼のばあい、まず1525年以降、左下腿の虚血性潰瘍、分類上は第4期の形で現れた。潰瘍部は感染をうけ、繰返し排膿を見るまでになっていた。

閉塞性動脈硬化症には冠動脈や脳動脈の硬化も合併しやすい。ルターは1532年、1543年に急性冠症候群ACSの発作をおこした。そして、1543年のACSは重症であった。以後、1544年、45年、46年にも同発作をおこし、46年のそれが命取りになった。

ルターにみられた痛風ないしは高尿酸血症は今日では“Multiple metabolic syndrome”として注目されている³²⁾。また、近年、尿路結石症はメタボリックシンドロームの1疾患であるともいわれている³³⁾³⁴⁾。ルターはメタボリックシンドロームの線上にある一連のこれら複数の生活習慣病に罹患していたことを私は強調したい。そして、これらと共存しながら、また、それにたいし積極的に治療をすることなく、ないしはむしろ逆らうような形で、当時としては63歳という長寿を全うしたのであった。

III-5 意識消失発作

ルターは何度も意識喪失(失神)の発作をおこしている。これをノイマンはメニエール病に帰せ

しめているが、このことは前述した本症の「診断基準」にそぐわないことは明らかである。彼のばあい、失神発作の原因は単一ではない。

1519年(36歳)のそれは長期にわたる精神的、肉体的の極限状態に追い詰められて内部環境の失調を来した結果、おこったものであった。

1523年(40歳)時の失神発作は化膿性中耳炎に続発した一過性の髄膜刺激症状ないしは脳圧亢進症状によるものであろう。

1527年(44歳)の失神、1532年(49歳)に突然起こった深い眠りはいずれも心原性ショックによるものであった。

III-6 医療(医師)不信

ルターは疾病にたいして実効上、全く無力な当時の医療を信用していなかったようである⁴⁾。彼は心疾患のため食事に節制を求められていたが、これはほとんど守られていなかったことは前述した。

彼はシュマルカルデンのことを回想している。薬を山とのまされた。牛に吞ませるくらい大量の水も飲まされた。治療には恥ずかしい思いもしたが、我慢をした。ルターは医療の有難みは認めつつも、「それに頼り切っている人は不幸せだ。一体、完璧な医者はいるのだろうか」と、言いきって、医療に不信、不満をぶっつけている。当時、経験的に分かっていた結石予防策についてルターは医師から聴かされてはいたが、とり合おうとはしなかった。ただ、今日でも勧められている大量の水分摂取については、(とくにお気に入りのナムブルクの)ビールを飲んではいた。これにより、よい睡眠をとることはできた。

今日の医学からみれば、たしかに当時の医療は全く無力ではあったが、医療サイドとしては「模範患者」ではなかったルターには言いたいこともあったことだろう。

IV 史実の後ろにある病歴

ルターの病歴をたどってゆくと、一般的な「ルター伝」に記されている偉大な史実、年譜と、そのときに彼が苦しんでいた疾病との乖離の小さく

ないことが気になる。史実は書き手の数だけあり得るだろうが、それらは病歴とは無関係ではあり得ない。ここでルターの病歴を視野に入れて、彼に関わる史実のいくつかをあらためて確認してみたい。

1521年、国会の審問に応ずるためにルターはウォルムスに向かった。道中、彼は民衆の歓呼に迎えられた。しかし、彼はやっとの思いでウォルムスにたどりついたのである。慢性の頑固な便秘、それに伴う胃腸症状、心症状のため道中、治療を受けながら14日をかけて、ようやく350kmの旅を終えたのであった。彼は完全に消耗していた。審問にまともに応えられる状況にはなかった。しかし、到着早々、翌日には審問を受け始めたのである。そして、彼は国会、ローマ教会に厳然として対決したと史実は伝えている^{12d)}。

しかし、ウォルムス到着時のルターの消耗ぶりは単に上記の器質性疾患のみに基因するものではなさそうであることは既に指摘したところである。彼のその後の経過を見れば、その時、いずれは顕症化するであろう器質性疾患が潜在していたとは思えない。一方、当時、彼といえども対教皇あるいは対国会との間の関係は大きな精神的ストレスであったにちがいない。

彼が時々「うつ」状態に陥っていたことを本文で述べた。また、彼は典型的な双極性傷害にかかっていたとのモックの見解も紹介した^{2b)}。ウォルムス到着前後にルターは強い「うつ」状態に陥っていた可能性は否定できないであろう。

1529年1月、かねてからのめまい、耳鳴、頭痛が悪化し、精神的に不安定になっていた。4月には重症の風邪にかかった。さらに、迫り来た悪疫のイギリス発汗熱の恐怖も加わり、体調はすぐれなかった。その上、うつ病、狭心症(1527年、ACS)もあった。また、彼はツイングリに好感を持ってはいなかった。そして、10月にヘッセン王のフィリップが主宰したマールブルクの宗教会議には参加することはなかった(始めから、参加する気はなかったという)。「会議は友好的雰囲気

のうちに進展した、……」という史実との落差の大きさには驚くほかはない^{12j)}。

1527年、ルターは身体的に第1回目の「変わり目」の年を迎えた。その年に彼はACSと思われる発作を4回おこしている。1530年には第2回目の「変わり目」の年を迎えている。行動能は低下し、問題の行動、言辞が多くなり、盟友メラントンははじめ人びとは彼から遠ざかるようになっていた。

1537年、福音主義者の同盟会議に出席するため、ルターはシュマルカルデンに出かけた。しかし、ここに滞在中に排尿障害は悪化し、尿閉を起こしてしまった。彼は死を予感して遺書をしたためるにいたったのである。既存の合併症(心、下腿、耳症状)も漸次悪化し、新たな合併症(赤痢)も加わり、このころから既に聖職者としての活動能は更に低下した^{12k)}。それまでの活動的なルターを見た同じ目で、その頃の彼を見ては理解に苦しむことだろう。40歳代後半、とくに50歳代以降の宗教家ないしは聖職者としてのルターを、それ以前のルターと日を同じくして論ずるのは慎重でなければならないと思われる。

V 結び

ルターの一生涯の後半は病いの連続であった。私は彼の器質性疾患を中心にその本態を文献的に紹介し、現代医学の立場から私見を交えて検討した。しかし、彼は多病に耐えながら人類史上に残る大業績を成遂げた強い意志の持ち主であった。私には評価を超えた偉人であったように思われる。

文献

- 1a) Vasold M. Pest, Not und schwere Plagen. Augsburg Bechtermunz Verlag 1999 p. 108-09
- 1b) *ibid* p. 120-122
- 2a) 金子晴勇ら。ルターを学ぶ人のために。京都 世界思想社 2008 p. 193
- 2b) 同書 p. 22-23
- 3a) Neumann H. Luthers Leiden. Berlin Wichern Verlag 1995 p. 65
- 3b) *ibid* p. 70
- 3c) *ibid* p. 150

- 3d) *ibid* p.98
- 4) Vasold M. Deutsches Allgemeines Sonntagsblatt. Gott u. die Welt. 1994 Nr. 1
- 5) Meller H. Fundsache Luthers. Saenssen-Anhalt: Theiss. 2009 p.48-49
- 6a) 大島智夫. 伝道私信 海老名だより. 1999年 95号
- 6b) 同書 2001年 108号
- 6c) 同書 2000年 98号
- 6d) 同書 2005年 111号
- 6e) 同書 2000年 99号
- 7a) モニク・リュスネ. ペストのフランス史(宮崎揚弘ら訳). 東京 同文館 平成10年 p.90
- 7b) 同書 p.96
- 8) Schreiber W. Infectio Basel Roche 1986 p.74
- 9) 岡田春恵. 歴史をつくった7大伝染病. 東京 PHP研究所 2008 p.65-80
- 10) 今井 晋. 人類の知的遺産. 東京 講談社 昭和57年 p.65
- 11) Schluz M. Der Spiegel. 27.10.2008
- 12a) 小牧 治ら. ルター 人と思想. 東京 清水書院 2004 p.5-7
- 12b) 同書 p.52-53
- 12c) 同書 p.206
- 12d) 同書 p.85
- 12e) 同書 p.92
- 12f) 同書 p.38-42
- 12g) 同書 p.99
- 12h) 同書 p.100
- 12i) 同書 p.103
- 12j) 同書 p.104
- 12k) 同書 p.109
- 13a) 成瀬 治. ルターと宗教改革. 東京 誠文堂新光社 1980 p.27
- 13b) 同書 p.221
- 14) 厚労省難治性疾患研究班. メニエール病診断基準 平成20年度報告書
- 15) 吉利 和監修. 新内科学大系 第14巻 東京 中山書店 p.4-5, 69-72, 120-121
- 16) 安田 聡. GERDにより胸痛を起こすことがあるか? クリニシャン 2010 57巻 p.181-186
- 17a) 徳善義和. 世界の思想家 5. ルター 東京 平凡社 昭和51年 p.19
- 17b) 同書 p.25
- 18) 平山忠造. 神経症候学. 改訂第2版 東京 文光堂 平成18年 p.680-681
- 19) 矢内原忠雄. 藤井武全集 第10巻 ルーテル伝 昭和15年 p.266
- 20) マクニール W.H. (佐々木昭夫訳). 疾病と世界史 東京 新潮社 1985 p.199
- 21a) メルクマニュアル第18版 日本語版 2006年, 東京日経BP社 p.784
- 21b) 同書 p.137-138
- 21c) 同書 p.317
- 22) 熊谷裕生ら編. 高血圧ナビゲーター第2版 メディカルレビュー社 東京 2008年 p.170-171
- 23) 松崎益徳. 日本内科学会雑誌(虚血性心疾患特集) 2009年 98巻2号 p.231-238
- 24) 浦部昌夫ら編. 今日の治療薬. 2010 東京 南江堂 p.374
- 25) 山下裕司. プライマリ・ケア医のためのめまい Basic Room 興和(株) 2009 Vol.7
- 26) 森山 寛ら編. 新図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座 第2巻 2004 東京 メジカルレビュー社 p.104-117, 132-135
- 27) 加我君孝ら編. 新臨床耳鼻咽喉科学 第2巻 耳 2002 東京 中外医学社 p.159-168
- 28) 大内 仁ら編. 臨床耳鼻咽喉科・頭頸外科全書 第2巻A 昭和61 東京 金原出版 p.279-294
- 29) 村上光右. 再発性尿路結石 千葉医学雑誌 1981 57巻5号 p.253-261
- 30) 後藤百万. 尿路結石 2009年11月 <http://allabout.co.jp/gm/gc/4601/>
- 31) 京都府医大泌尿器科学教室. 尿路結石症 2010年4月 <http://www.kpum-urology.jp>
- 32) 山内俊一. 高尿酸血症と糖尿病. 鳥居薬品 2002年2月
- 33) 郡 健二郎. 尿路結石の痛みはメタボリックシンドロームの警鐘である. Medicament News. 2010年9月 2026号
- 34) 細谷龍男. 高尿酸血症と腎障害. 日本内科学会雑誌 2009年98号 p.2344-2348

Medical History of Martin Luther

Tadashi TAKIGAMI

Chief of Kanagawa Branch
Japan Society of Medical History

Martin Luther achieved great success in religious reformation, though he was said to have suffered from many kinds of diseases during his lifetime. Unfortunately, however, his medical history has never been reported in Japan.

Since the second half of his thirties, he was suffering from severe constipation, causing hemorrhoids and anal prolapse. At the beginning of his forties he had vertigo, tinnitus and headaches, which were the signs of chronic purulent otitis media and ended in left otorrhea and pyorrhea of the left mastoiditis.

Nearly at the same time, he started to suffer from anginal pain, colic and dysuria due to urinary uric acid stones, gout and left leg ulcer, which were all caused by metabolic syndromes. The last 1/3 of his life was affected by the shadow of diseases, and his religious activities were frequently disturbed.

He died from myocardial infarction at the age 63, in February 1546.

Key words: Martin Luther's Diseases, Cause of Martin Luther's death, Plague, Syphilis, English Sweat